

小論文

受験番号	氏名
------	----

【問題】以下の文章を読み、問に答えよ。

言葉づかいには世間で一般に正用と認められているものと、それをはずれた誤用というものがある。誤用すると、言葉を知らない、教養が低いと思われて恥をかいったり、伝えたいことが正しく伝わらず、誤解を起こしたりする。

ある編集者が執筆者との連絡の際、「この件はどうぞご放念下さい」と書くべきところを「ご失念下さい」と書き、親切なその執筆者からたしなめられたという話がある。「放念する」も「失念する」も和語に直せば同じ「わすれる」になるが、「放念する」の方は「気にしないで記憶から消し去る」ことであり、「失念する」は「覚えていなければならないことをうっかり忘れる」ことである。

何が正用で何が誤用かを定める基準はけっして固定したものではなく、時代とともに移り変わって行く。(中略)

世の中には、むかしからの言葉づかいと違うものは何でも誤用だ、乱れだという人たちもいるけれども、言葉はいろいろな理由で必然的に変わって行くものであり、われわれはそれに抗するすべを持たないのであって、過去の用法にとられる、かたくなな態度は考えものである。世間全体の言語活動ができるだけ円滑に進むようにするためには、新しい変化には柔軟に対応するだけの余裕が必要である。(中略)

誤用はまず大きく二つに分けられる。その一つは若い人たちなど日本語の学習が不十分な人びとが犯すもので、これはぜひ直してもらわなければならない。もう一つは、長い目で見れば言葉の変化の先駆けである場合である。

歴史的に見ればあとの時代に正用になる新しい変化も、伝統とはことなるという理由で誤用とか乱れとかいわれるのが世の常である。たしかに、言葉は伝達の道具であるから、変化は避けられないにしても、出来るだけゆっくりの方がよい。あまり変化が激しいと意志の疎通に支障をきたす。(中略)

新しい変化の中にはかなり広く普及してしまっていて、いくら誤用だ乱れだと叫んでみてもすでに押し留められなくなっているものもある。そのよい例が可能を表わす「来られる・食べられる」などを「来れる・食べれる」と言う場合である。いまでも「来れる・食べれる」と聞くと、勉強の出来ない子のように思ってしまうという人がいるけれども、実際には勉強とか教養とは関係がない。これなど近い将来には正用となるものと思われる。誤用と正用の境界線は明瞭なものではなく、程度問題であり、また時代と共に移って行くものでもある。

文字づらを見ると明らかに不合理な言いかたでも、世間全般に認められてしまえば正用として堂々と通用することになる。例えば、「あまり感心しない」という意味で「ぞっとしない」ということがある。この「ぞっと」は怖い思いをして「ぞっとする」の「ぞっと」であ

るから、このいい方には非常に無理があるが、世間に通用しているだけの理由でだれも誤用だといって騒がない。もう一つ、意味から考えると非論理的であるのに広く用いられている表現として「骨を埋める」というのがある。

(1) おそらく一生ドイツで暮らし、ドイツに骨を埋める覚悟であろうが、やはり魂は日本人で、絶えず日本人として意識が働くそうである。(良永伊勢『主婦の見たもうひとつのドイツ』三修社)

(2) 「あんな地球のさいはての国に、きみは骨を埋めたいのかね」(深田祐介『革命商人』新潮社)

用法から見れば「骨を埋める」のは明らかに本人であり、死んで骨になった人が自分でその骨を埋めると表現している。これは一種の誇張表現としか考えられないが、いうならば、自分の骨を埋めるためには死ぬまでそこにいなければならない、つまり「死ぬまでその土地に住む」という意味解釈が出てくることになる。

いまはおそらく一般の人びとにはその誇張性も非論理性も意識されず、短絡的に「骨を埋める覚悟＝死ぬまで住む覚悟」と解釈されているのだろうと思われる。(中略)

このように見て来ると、ことは一に一般に認められるか否かに掛かっているといえる。「言葉は理屈ではない」といえる面があることに留意しなければならない。

(中略)

このような、一般にどの程度容認されているか、また容認してよいかという判定にはかなりの幅があり、判定のし方にも個人差がある。つまり大きく分ければ保守派と容認派の違いがある。

出典：国広哲弥『日本語誤用・慣用小辞典』、講談社、3-8、1991年、一部改変

問1 この文章を200字以内で要約しなさい。

問2 この文章を読んで、あなたが医療従事者となった時に、対象者や医療関係者とのコミュニケーションで言葉づかいにどのように気を付ければよいか、あなたの考えを600字以内で述べなさい。